竜舌蘭

寺田寅彦

一日じめじめと、人の心を腐らせた霧雨もやんだようで、静かな宵闇の重く湿った空に、どこかの汽笛が長い波線を引く。さっきまで「青葉茂れる桜井の」と繰り返していた隣のオルガンがやむと、まもなく門の鈴が鳴って軒の葉桜のしずくが風のないのにばらばらと落ちる。「初雷様だ、あすはお天気だよ」と勝手のほうでばあさんがひとり言を言う。地の底空の果てから聞こえて来るような重々しい響きが腹にこたえて、昼間読んだ悲惨な小説や、隣の「青葉しげれる桜井の」やらが、今さらに胸をかき乱す。こんな時にはいつもするように、机の上にひじを突いて、頭をおさえて、

何もない壁を見つめて、あった昔、ない先の夢幻の影を追う。なんだか思い出そうとしても、思い出せぬ事があってうっとりしていると、雷の音が今度はやや近く聞こえて、ふっと思い出すと共に、ありあり目の前に浮かんだのは、雨にぬれた竜舌蘭（りゅうぜつらん）の鉢（はち）である。

河野（こうの）の義（よし）さんが生まれた年だから、もうかれこれ十四五年の昔になる。自分もまだやっと十か十三ぐらいであったろう。きたる幾日義雄（よしお）の初節句の祝いをしますから皆さんおいでくださるようにとチョン髷（まげ）の兼作爺（かねさくじい）が案内に来て、その時にもらった紅白の餅（もち）が大きかった事も覚えている。いよいよその日となって、

母上と自分と二人で、車で出かけた。おりからの雨で車の中は窮屈であった。自分の住まっている町から一里半余、石ころの田舎道（いなかみち）をゆられながらやっとねえさんの宅（うち）へ着いた。門の小流れの菖蒲（しょうぶ）も雨にしおれている。もうおおぜい客が来ていて母上は一人一人にねんごろに一別以来の辞儀をせられる。自分はその後ろに小さくなって手持ちぶさたでいると、おりよくここの俊ちゃんが出て来て、待ちかねていたというふうで自分を引っ張ってお池の鯉（こい）を見に行った。ねえさん所には池があっていいと子供心にうらやましく思うていた。池はちょっとした中庭にいっぱいになっていて、門の

小川の水が表から床下をくぐってこの池へ通い裏田んぼへぬけるようにしてある。大きな鯉、緋鯉（ひごい）がたくさん飼ってあって、このごろの五月雨（さみだれ）に増した濁り水に、おとなしく泳いでいると思うとおりおりすさまじい音を立ててはね上がる。池のまわりは岩組みになって、やせた巻柏（まきがしわ）、棕櫚竹（しゅろちく）などが少しあるばかり、そしてすみの平たい岩の上に大きな竜舌蘭（りゅうぜつらん）の鉢が乗っている。ねえさんがこの家へ輿入（こしい）れになった時、始めてこの鉢（はち）を見て珍しい草だと思ったが、今でも故郷の姉を思うたびにはきっとこの池の竜舌蘭を思い出す。今思い出したのはこの鉢であった。

池を隔てて池(いけ)の間(ま)と名のついたこの小座敷の向かい側は、台所に続く物置きの板蔀(いたじとみ)の、その上がちょっとしゃれた中二階になっている。

あのころの田舎(いなか)の初節句の祝宴はたいてい二日続いたもので、親類縁者はもちろん、平素はあまり往来せぬ遠縁のいとこ、はとこまで、中にはずいぶん遠くからはるばる泊まりがけで出て来る。それから近村の小作人、出入りの職人まで寄り集まって盛んな祝いであった。近親の婦人が総出で杯盤の世話をし、酌(しゃく)をする。その上、町から芸者を迎えて興を添えさせるのが例なので、この時も二人来ていた。これも祝いのあ

るうちは泊まっているので、池の向こうの中二階はこの芸者の化粧部屋にも休憩所にもまた寝室にもなっていた。

　夕方近くから夜中過ぎるまで、家じゅうただ目のまわるほど忙しく騒がしい。台所では皿鉢のふれ合う音、庖丁の音、料理人や下女らの無作法な話し声などで一通り騒がしい上に、ねこ、犬、それから雨に降り込められて土間へ集まっている鶏までがいっそうのにぎやかさを添える。奥の間、表座敷、玄関とも言わず、いっぱいの人で、それが一人一人にお辞儀をしてはむつかしい挨拶を交換している。

その混雑の間をくぐり、お辞儀の頭の上を踏み越さぬばかりに杯盤酒肴を座敷へはこぶ往来も見るからに忙しい。子供らは仲間がおおぜいできたうれしさで威勢よく駆け回る。いったい自分はそのころから陰気な性で、こんな騒ぎがおもしろくないから、いつものように宵のうちいいかげんごちそうを食ってしまうと奥の蔵の間へ行って戸棚から八犬伝、三国志などを引っぱり出し、おなじみの信乃や道節、孔明や関羽に親しむ。この室は女の衣装を着替える所になっていたので、四面にずらりと衣桁を並べ、衣紋竹を掛けつらねて、派手なやら、地味なやらいろんな着物が、虫干しの時

のように並んでいる。白粉(おしろい)臭い、汗くさい変な香がこもった中で、自分は信乃(しの)が浜路(はまじ)の幽霊と語るくだりを読んだ。夜のふけるにつれて、座敷のほうはだんだんにぎやかになる。調子を合わす三味線の音がすると、清らかな女の声でうたうのが手に取るように聞こえる。調子はずれの鄙歌(ひなうた)が一度に起こって皿(さら)をたたく音もする。ひとしきり歌がやんだと思うと、不意に鞭声粛々(べんせいしゅくしゅく)とたれやらがいやな声でわめく。

信乃が腕をこまねいてうつむいている前に片手を畳につき、片袖(かたそで)をくわえている浜路の後ろに、影のように現われた幽霊の絵を見ていた時、自分の後ろの唐紙(からかみ)

がするするとあいて、はいって来た人がある。見ると年増（としま）のほうの芸者であった。自分にはかまわず片すみの衣桁（いこう）に掛かっている着物の袂（たもと）をさぐって何か帯の間へはさんでいたが、不意に自分のほうをふり向いて「あちらへいらっしゃいね、坊ちゃん」と言った。そして自分のそばへ膝（ひざ）のふれるほどにすわって「オオいやだ、お化け」と絵をのぞく。髪の油がにおう。二人でだまって無心にこの絵を見ていたらだれかが「清香（きよか）さん」とあっちのほうで呼ぶ。芸者はだまって立って部屋（へや）を出て行った。

　俊ちゃんと二人で奥の間で寝てしまったころも、座

敷のほうはまだ宵（よい）のさまであった。

　あくる日も朝から雨であった。昨夜の騒ぎにひきかえて静かすぎるほど静かであった。男は表の座敷、女どうしは奥の一間へ集まって、しめやかに話している。母上はねえさんと押し入れから子供の着物など引きちらして何か相談している。新聞を広げた上に居眠りを始めている人もある。酒のにおいのこもった重くるしいうっとうしい空気が家の中に満ちて、だれもかれも、とんと気抜けのしたようなふうである。台所ではおりおりトン、コトンと魚の骨でも打つらしい単調な響きが静かな家じゅうにひびいて、それがまた一種の眠け

をさそう。中二階のほうで、つまびきの三弦の音がして「夜の雨もしや来るかと」とつやのある低い声でうたう。それもじきやんで五月雨（さみだれ）の軒の玉水が亜鉛のとゆにむせんでいる。骨を打つ音は思い出したように台所にひびく。

昼から俊ちゃんなどと、じき隣の新宅（しんたく）へ遊びに行った。内の人は皆ねえさんのほうへ手伝いに行っているので、ただ中気（ちゅうき）で手足のきかぬ祖父（おじい）さんと雇いばあさんがいるばかり、いつもはにぎやかな家もひっそりして、床の間の金太郎や鐘馗（しょうき）もさびしげに見えた。十六むさし、将棋の駒の当てっこなどしてみたが気が乗ら

ぬ。縁側に出て見ると小庭を囲う低い土塀（どべい）を越して一面の青田が見える。雨は煙のようで、遠くもない八幡（はちまん）の森や衣笠山（きぬがさやま）もぼんやりにじんだ墨絵の中に、薄く萌黄（もえぎ）をぼかした稲田には、草取る人の簑笠（みのかさ）が黄色い点を打っている。ゆるい調子の、眠そうな草取り歌が聞こえる。歌の言葉は聞き取れぬが、単調な悲しげな節で消え入るように長く引いて、一ふしが終わると、しばらく黙ってまたゆるやかに歌い出す、これを聞いているとなんだか胸をおさえられるようで急にねえさんの宅（うち）へ帰りたくなったから一人で帰った。帰って見るともうそろそろ客が来始めて、例のうるさいお辞儀が

始まっている。さっきから頭が重いようで、気が落ち付かぬようで人に話しかけられるのがいやであったから、ひとりで蔵の間へはいって八犬伝を見たが、すぐいやになる。鯉（こい）でも見ようと思って池の間へ行って見た。縁側の柱へ頭をもたせてぼんやり立つ。水かさのました稲田から流れ込んだ浮き草が、ゆるやかに回りながら、水の面へ雨のしずくがかいては消し、かいては消す小さい紋といっしょに流れて行く。鯉は片すみの岩組みの陰に仲よく集まったまま静かに鰭（ひれ）を動かしている。竜舌蘭（りゅうぜつらん）の厚いとげのある葉がぬれ色に光って立っている。中二階の池に臨んだ丸窓には、昨夜の

清香のさびしい顔が見える。窓の縁に頰杖（ほおづえ）をついたまま、何やら物思わしそうに薄墨色の空のかなたを見つめている。こめかみに貼（は）った頭痛膏（ずつうこう）にかかるおくれ毛をなでつけながら、自分のほうを向いたが、軽くうなずいて片頰（かたほお）で笑った。

夕方母上は、あんまり内をあけてはというので、姉上の止めるのにかかわらず帰る事になった。「お前も帰りましょうね」と聞かれた時、帰るのがなんだかなごり惜しいような気もして「ウン」と鼻の中で曖昧（あいまい）な返事をする。ねえさんが「この子はいいでしょう。ねえ、お前もう一晩泊まっておいで」とすすめる。これ

にも「ウン」と鼻で返事する。「泊まるのはいいがねえさんに世話をおかけでないよ」と言っていよいよ一人で帰るしたくをせられる。立て場まで迎えにやった車が来たのでねえさんと門まで送って出た。車が柳の番所の辻（つじ）を曲がって見えなくなった時急に心細くなって、いっしょに帰ればよかったと思う。「さあおいで」とねえさんは引っ立てるように内へはいる。

頭のぐあいがいよいよ悪くなって心細い。母上といっしょに帰ればよかったと心で繰り返す。けむる霧雨の田んぼ道をゆられて行く幌車（ほろぐるま）の後ろ影を追うような気がして、なつかしいわが家の門の柳が胸にゆら

ぐ。騒々しい、殺風景な酒宴になんの心残りがあって帰りそこなったのか。帰りたい、今からでも帰りたいと便所の口の縁へ立ったまま南天(なんてん)の枝にかかっている紙のてるてる坊さんに祈るように思う。雨の日の黄昏(たそがれ)は知らぬまに忍び足で軒に迫ってはや灯(ひ)ともしごろのわびしい時刻になる。家の内はだんだんにぎやかになる。はしゃいだ笑声などが頭に響いてわびしさを増すばかりである。

　姉上に、少し心持ちが悪いからと、言いにくかったのをやっと言って早く床を取ってもらって寝た。

萌黄地(もえぎじ)に肉色で大きく鶴(つる)の丸(まる)を染め抜いた更紗蒲団(さらさぶとん)が

今も心に残っている。頭がさえて眠られそうもない。天井につるした金銀色の蠅除(はえよ)け玉に写った小さい自分の寝姿を見ていると、妙に気が遠くなるようで、からだがだんだん落ちて行くようななんとも知れず心細い気がする。母上はもううちへ帰りついて奥の仏壇の前で何かしていられるかと思うとわけもなく悲しくなる。ねえさんのうちがにぎやかなのに比べてわが家のさびしさが身にしむ。いろんな事を考えて夜着の領(えり)をかんでいると、涙が目じりからこめかみを伝うて枕(まくら)にしみ入る。座敷では「夜の雨」をうたうのが聞こえる。池の竜舌蘭(りゅうぜつらん)が目に浮かぶと、清香の顔が見えて片頬(かたほお)

で笑う。

　この夜すさまじい雷が鳴って雨雲をけ散らした。朝はすっかり晴れて強い日光が青葉を射ていた。早起きして顔を洗った自分の頭もせいせいして、勇ましい心は公園の球投（たまな）げ、樋川（ひかわ）の夜ぶりと駆けめぐった。

　義（よし）ちゃんは立派に大きくなったが、竜舌蘭（りゅうぜつらん）は今はない。

　雷はやんだ。あすは天気らしい。

（明治三十八年六月、ホトトギス）

底本：「寺田寅彦随筆集　第一巻」小宮豊隆編、岩波文庫、岩波書店
１９４７（昭和22）年２月５日第１刷発行
１９６３（昭和38）年10月16日第28刷改版発行
１９９７（平成９）年12月15日第81刷発行
※「「泊まるのはいいがねえさんに」は、底本では「泊まるのはいいがねえさんに」ですが、親本を参照して直しました。
入力：田辺浩昭
校正：田中敬三
１９９９年11月17日公開

２００３年10月22日修正

青空文庫作成ファイル：

このファイルは、インターネットの図書館、青空文庫（http://www.aozora.gr.jp/）で作られました。入力、校正、制作にあたったのは、ボランティアの皆さんです。